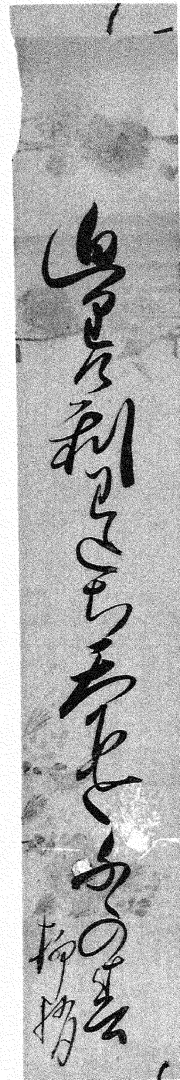


樂^び時^じそして

芭蕉との交流

このセクションには、きわめて珍しい資料を展示してあります。

樂時に関しては、俳諧活動をはじめた頃の短冊と晩年の手紙が展示してあります。芭蕉との交流に関しては、江戸における交流を「月十四日」の真蹟懷紙で示し、谷村における交流を俳諧古巻で示してあります。

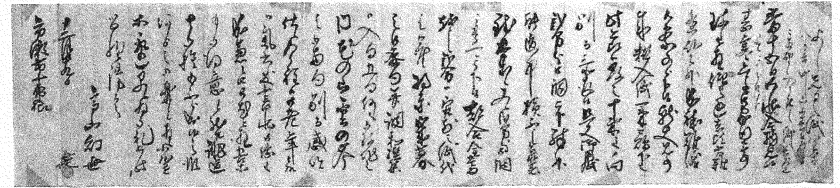


「廻りけり」発句短冊

「廻りけり」 発句短冊 (柿衛文庫蔵)

廻りけりわだち天下を千々の春 柳梢

樂時の「柳梢」号での真蹟短冊。「東日記」(延宝九年刊)の「ぬれぬ先こそ親の前でも猫の恋 春吟庵柳梢」の他に、柳梢としての入集は知られていない。句は、毎年毎年が巡りくることを、車のわだちに譬えたもの。人それぞれの初春が、この世に訪れるのである。年々の推移を、車輪によってできる轍(わだち)で表現したところが、一句の趣向である。句の内容といい、趣向といい、談林的な性格をよく示している。



十二月十九日付 市瀬市十郎宛幻世書簡

尚々、先日之紙、八王寺
八日町山上善右衛門より
被相届候。今度之紙も善右衛門迄
被遣可被下候。以上
当十五日御状令拝見候。
甚寒候へども、御家内無事
珍重存候。仰之通、去頃火難
逢、以之外成体、難儀
御察可被下候。就夫見事
成細入紙一束、被贈下候。
此節ハ常之十束にも向、
別而忝存候。且又、御用紙
式分分御調被下、殊外
能、道中損不申参着
致、大慶候。又々式分分、御調
被遣可被下候。都合、金巻而
越申候。式分ハ最前之紙代
にて御座候。将亦、歳暮
之御発句并調和撰集
御入句五句、何も御珍作之
内、花の山・雲の岑
之御両句、別而感吟
仕候。今程ハ御老年候故、
御氣六敷、書状御認も
成兼候由、御尤二存候。吾等
も御同意候。然共誹道
は御捨も不被成候之段、
何より之御案と存候。小屋懸
等取込、早々為御礼如此候。
恐惶謹言
高山幻世
十二月十九日
市瀬市十郎
繁文 印

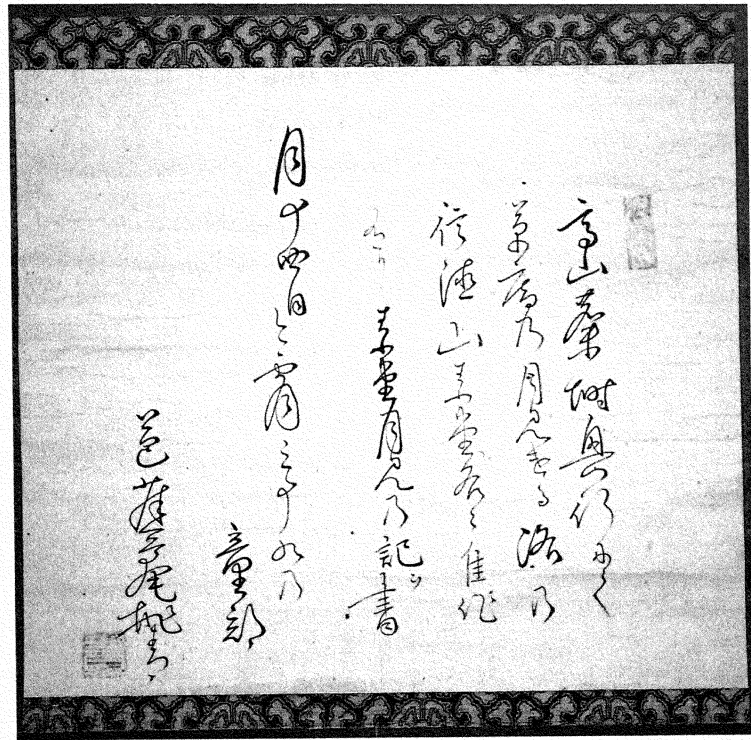
十二月十九日付市瀬市十郎宛幻世書簡 (回木家蔵) 一通

樂時の晩年の状況を伝える書簡である。

本書簡は池原鍊昌が『甲斐俳壇と芭蕉の研究』(日本図書刊行会、昭62)に、紹介したものである。市瀬市十郎は、甲州俳書の嚆矢・「俳諧白根嶽」を出版した調実のことである。

書簡の内容は、調実の家業に関わる、紙の取引について事務的連絡が展開しており、後半には調実から報じられた五句に関して「花の山」(花の山不食の人に用べし)と「雲の岑」(何の常風に崩る雲の岑)がよいと評している。また、当時、樂時は火災にあつて

おり、仮の住まいの小屋がけに住しており、難儀のいたりであつたこともわかる。ただし、それは川越に転封以降のことであつた。なお、「幻世」号を使用しているので、正徳四(一七二四)年以降、享保二(一七一七)年までのことと、想像される。なぜそのような判断するのかというと、主君・秋元喬知が正徳四年に没した折、樂時は剃髪して出家する。その折の号が「幻世」であると想定できるからである。享保二年に樂時は他界。川越における、厳しい晩年の様相が偲ばれる貴重な一通。



「月十四日」真蹟懷紙

「月十四日」真蹟懷紙 (個人蔵) 一幅

芭蕉と藥埒との交流を伝える、貴重な真蹟である。

(関防印「江上臨川」)

高山藥埒興行にて

草庵の月見ける 洛の

信徳 山素堂 各々佳作

有り 素堂月見の記ヲ書

月十四日今宵二十九の童部

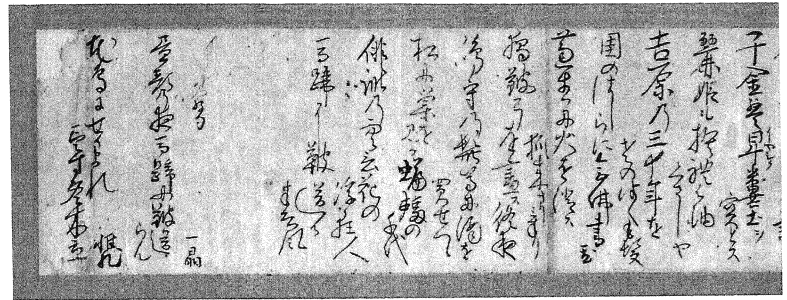
芭蕉庵桃青

(落款印「青」)

秋元藩家老の高山藥埒が主催して、深川の芭蕉庵で月見の会が興行される。その会に京都の俳人・伊藤信徳、さらには芭蕉の友人の隠者・山口素堂も参加したのである。その折の月見会に興じて、素堂は「月見の記」を記したのでという。満月に至らぬ「十四日の月」と不惑(四十歳)に至らぬ己の状況とを、重ね合わせて興じた一句と思われる。

本資料は、上野洋三の手により、「新出「月十四日」芭蕉自筆懷紙」(『会報大阪俳文学研究会』33)として紹介されたものである。ただし、一句の解釈とともに成立年次に關しても、微妙な揺れが觀察されるものでもある。天和二年成立説と貞享元年成立説の二つである。その具体に關しては、本目録末尾の「芭蕉と藥埒」を参照されたい。

5.



芭蕉俳諧古巻 (個人蔵) 一幅

天和二年十二月二十八日、駒込大円寺から出火した炎は、江戸の大半を焼き尽くす。そのために、深川の芭蕉庵も被災したのであつた。住居を失つた芭蕉を救つたのが、谷村の秋元藩家老・樂塙である。

翌天和三(一六八三)年夏、芭蕉は芳賀一晶とともに、谷村を訪問する。その折に、巻かれた俳諧の歌仙(二十六句連ねる形式)二巻の写しが、本巻である。

本連句に関しては、従来はあまり正確な本文を知ることができず、不明なところも多かった。今回、石川真弘・牛見正和の手により「芭蕉俳諧古巻」として、「ビブリア」(平11・5)に紹介された。

芭蕉の真蹟ではないが、芭蕉の筆蹟の特徴を非常によく伝える、忠実な写しである。末尾には、次の記事もみえる。

発句

昼顔の夜馬蹄に鞍送らん

花鳥にせがまれ尽す冬木立

ここにおいて、従来の芭蕉全集等では知られなかった、正確な本文を入手することができたことになる。ともに喜びたい。

なお、連句の本文と内容に関しては、末尾の「芭蕉と樂塙」に注釈が試みられているので、そちらの方を参照されたい。